

会議名	日本畜産学会第108回大会
開催日時	2007年9月26日～27日
開催場所	岡山大学 津島キャンパス
主催者	日本畜産学会
参加人数(概数)	会期中に優秀発表賞応募講演、一般講演、公開シンポジウムが行なわれた。さらに畜産学会閉会后、関連学会および研究会が行なわれたので、参加者は多数であった。
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>優秀発表賞応募講演題講演：</p> <p>本講演の目的は若手研究者の研究成果を顕彰し、将来の発展を期待するもので、ABCDの4会場に分かれて、成果が発表された。「異なると殺 endpoint での黒毛和種の格付ならびに画像解析形質の遺伝評価」、「ブタ成熟脂肪細胞および顆粒膜細胞における脱分化機構の網羅的解析」、「ニワトリ生殖細胞の新規単離法の開発と生殖細胞系列キメラニワトリの作出」、「山羊の放牧利用のための冬季カバークロープの選定」、「実規模施設における家畜排せつ物のコンポスト化と微生物群集構造」など17演題が発表され、慎重審査の結果、このうち村上要氏ほかの「骨格筋由来高脂肪分化細胞クローンの樹立と筋・脂肪分化能の解析」など5課題が優秀発表賞に選ばれた。</p> <p>一般講演：</p> <p>一般講演のうち、繁殖・生殖工学の領域については、26日と27日に分かれて、同一会場で発表が行なわれた。演題は総計21演題であった。この領域の研究は、領域も広く、テーマも多岐であり、方法も多様であって、それぞれの課題は深化し、立派な成果が発表されていた。生殖工学の領域の課題は、時代の要請もあって課題数が多かった。このうち、ウシの課題は2、ブタの課題は8、ニワトリの課題は2であったが、ブタの課題数が多かったのは、ブタについての喫緊の課題が多かったのかもしれないが、ウシについてはBSE関連の事情で研究材料採取に問題点があったことも考えられる。ニワトリについての2課題のうち、一課題は「発生工学による新規家禽育種戦略構築の試み」のタイトルで発表されたが、発生工学的手法を用いて家禽育種や再生医学に応用する実験系の確立を試みたもので、この方面の基礎的知見として有用であると思われた。</p> <p>生殖工学以外の課題では、「ウシ黄体由来血管内皮細胞(LEC)のprostaglandin F2 (PGF)分泌調節機構の解明」などがあり、LECのPGF分泌調節にプロジェステロンおよび体内の低酸素系環境が関与することを示唆する結果が発表された。</p> <p>さらに、「ウシ黄体におけるcellular FLICE-like inhibitory protein (cFLIP)の発現機構」では、cFLIPは黄体初期から形成期におけるアポトーシスを抑制し、黄体形成ならびに発達に間接的に貢献する可能性を明らかにした。また、「粗濃比の異なる飼料を給与した乳牛における第一胃内容液エンドトキシン濃度と栄養代謝状態および卵巣機能との関係」では、泌乳初期の第一胃内容液中エンドトキシン濃度の増加が糖代謝異常を引き起こし、疾病発生および卵巣周期再開を延期させる可能性を明らかにしている。</p>

<p>2 .今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題</p>	<p>繁殖・生殖工学分野の演題としては、卵子を扱った生殖工学の課題が圧倒的に多かった。これは時代の要請に応えた結果と言えるのかもしれない。</p> <p>「走査型電気化学顕微鏡によるブタ体外受精胚の呼吸量測定と品質評価」の課題では、演者らが、これまでマウスおよびウシ胚で明らかにしてきた結果を本実験ではブタ胚に応用して、ブタにおいても呼吸量の測定によって胚の品質を明らかにできることを示唆する結果を報告している。胚の品質が簡単に評価できれば、今後の利用価値は大きい。</p> <p>フィールドに密着した課題としては、県の畜産試験場と、県の農林振興局が、民間の研究機関と協力して報告された「ガス濃度調整剤による胚の簡易培養：低ランク胚の有効利用について」がある。本課題は大掛かりな設備を必要としないガス濃度調整剤の利用によって胚の短期培養が可能であることを明らかにしたもので、更なる研究の発展によって、低ランク胚の有効利用が可能であることを示した。</p>
<p>3 .その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>公開シンポジウム： 公開シンポジウムの大課題は「地域資源を活用した食品ブランドの創出」であった。このうちの中課題は「食品ブランド創出に向けた取り組みと課題」で、蒜山ジャージー牛についての魅力や、地域食品廃棄物を利用した霜降り豚肉生産技術の開発とブランド化のテーマで兵庫県の例を、さらに岡山県の吉田牧場が全国区になるまでのテーマで、吉田牧場の例を話題提供された。</p> <p>の中課題は「食品ブランド創出に向けた新展開」の課題で、プロバイオティック乳酸菌を利用した新機能性ヨーグルト等の開発、健康に良いおいしい食肉製品の創出 発酵ソーセージを例としてのテーマで、東北大学、広島大学の例を話題提供された。最後にパネルディスカッションで、これら話題提供者相互間の意見交換やフロアーからの質問・討論がされ、有意義なシンポジウムであった。</p>
<p>4 .今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>最近の大学や研究機関の一般的な傾向として、短期間で目に見えた成果の報告が要請され、そのために、研究課題が小粒になりかねない。出来得れば、継続性があり、国際的にも優れた、わが国独自の研究プロジェクトが組めないものかと思う。</p> <p>さらに、個別の研究機関の成果では、研究費も限られるし、国際社会に向けての知財の確立には程遠い。そのためには今回のような学会の機会を通じて、共同研究のネットワークを築ければと思う次第である。また、課題の中には国際的な共同研究も散見されて心強いことであった。</p>
<p>5 . 会議の所感</p>	<p>今回の学会は主催者のご努力と開催校のご尽力の賜物によって、参加者も多く、討論も活発で、得られた成果は大きかったと思う。また、本学会における座長の卓越した討議の進行には敬服した。若手研究者の発言を促し、発表者と質問者の意図が噛み合わないところは補足するなど、討議の価値を高めていた。また、進行も、ほぼスケジュール通りで、他会場との掛け持ちで聴講する者にとっては大変有難かった。今後の畜産研究のさらなる発展を祈念したい。</p>
<p>報告者</p>	<p>森 純一</p>